

愛のない結婚だったはずなのに～冷酷侯爵様に毎夜 甘く求められています～

プロローグ

「今夜も、お前の務めを果たせ」

夕食の席で、夫であるアレクシス・フォン・ローゼンハイム侯爵は、ワイングラスを傾けたまま私に視線すら寄越さずにそう命じた。氷のように冷たい声だった。私、エレオノーラはフォークを置く手を震わせながら、ただ「はい」とだけ答える。この結婚が政略によるものであり、夫にとって私が単なる子孫を残すための器に過ぎないことは、結婚して半年が経つ今では痛いほど理解していた。彼は夜の営みを「義務」と呼び、私を抱くときも決して心を開かない。それなのに、彼の指が私の肌に触れるたび私の体は裏切るように熱を帯びてしまう自分が、情けなくてならなかった。

寝室に入ると、すでにアレクシスは寝台の縁に腰掛けて待っていた。黒い絹の寝間着をまとった彼の横顔は、月明かりに照らされて彫刻のように整っている。だが、その蒼い瞳には一片の情も宿っていない。私は彼の前に立ち、ゆっくりと夜着の紐を解いた。絹が肌

を滑り落ち、素肌が冷たい夜気に晒される。アレクシスは無言のまま、私の手首を掴んで寝台に引き倒した。

「……っ」

背中が柔らかな布団に沈むと同時に彼の体が覆い被さってくる。彼の手が私の胸を乱暴に掴み、指先で乳首を摘み上げた。痛みと同時に背筋を電流のような快感が走る。私は唇を噛み締めて声を押し殺した。声を上げれば、彼はそれを「淫らだ」と嘲笑するに違いない。けれど、彼の指が私の敏感な場所を探り当て濡れた秘部を遠慮なく広げる頃には、理性の箍は音を立てて外れそうになる。

「もう、こんなに濡れているのか」

アレクシスの声には、呆れと僅かな軽蔑が混じっていた。私は羞恥で顔を背けるが、彼はそれを許さず顎を掴んで無理やり自分と視線を合わせさせる。彼の蒼い瞳が、暗闇の中で獲物を値踏みする獣のように光っていた。

「お前は、愛がなくても感じる女だということを身をもって教えてやろう」

そう囁くと、彼は私の足を大きく開かせ自身の昂りを秘部の入り口に押し当てた。先端が濡れた花弁を割り開き、彼が腰を突き入れる。一気に奥まで貫かれた衝撃で、私は悲鳴を嘯み殺しながらシーツを握り締めた。彼のものが私の内壁を擦り上げるたび、身体の奥から甘い痺れが込み上げてくる。

「動かないで……ああ、そんな、激しく……っ」

懇願は喘ぎ声に変わり彼の腰の動きは容赦なく私を追い詰めていく。結合部から聞こえる水音が、静かな寝室に淫らに響いた。彼は私の両足を肩に担ぎ上げ、より深い位置で私を突き刺す。そのたびに私の視界が白く弾ける。

「イくのか？ この淫乱な体で、夫に抱かれて悦ぶのか」

「ちが……ああ、ああっ！」

否定の言葉は最後まで紡げず私は彼の腕の中で激しく身体を痙攣させながら絶頂に達した。彼はまだ達しておらず、私の痙攣を楽しむかのようにゆっくりと腰を動かし続ける。私は羞恥と快感の狭間で涙を浮かべ、彼の胸に爪を立てた。

「泣いているのか。愛されない夜に、それでも体は正直だな」

彼の冷たい言葉が胸に刺さる。それなのに、身体はまだ彼を求めて蠢いている。その矛盾に、私は自分自身が壊れてしまいそうだった。彼は私をうつ伏せにし、後ろから再び深く挿入した。枕に顔を埋め私は声を押し殺して泣いた。愛のないはずの交わりが、こんなにも私の心を揺さぶるのはなぜなのか。彼の指が私の腰を強く掴み、奥の一番敏感な場所を突き上げる。私は枕に顔を押し付け、くぐもった悲鳴を上げながら二度目の絶頂に沈んでいった。やがて彼が低い唸り声とともに私の中で果てた後、私は力なくシーツの上に崩れ落ちた。アレクシスは黙って体を離し、背を向けて眠ってしまう。私は涙で濡れた頬を拭うこともできず、ただ天井を見つめながらこの結婚の虚しさを噛み締めていた。

第一章 氷の侯爵

私、エレオノーラ・フォン・ローゼンハイムは、十八歳の春にこの国でも屈指の名門であるローゼンハイム侯爵家に嫁いだ。実家は没落寸前の子爵家で、私には三人の妹がいる。父は領地経営に失敗し、多額の借金を抱えていた。そんな中ローゼンハイム家から突然の縁談が舞い込んだのは、まさに奇跡のように思えた。相手は社交界でも「氷の侯爵」と噂されるアレクシス様。二十七歳という若さ